

Title	大英帝国の「外国語大学」 : Fort William College の創設から廃校まで
Author(s)	倉橋, 愛
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/61834">https://doi.org/10.18910/61834</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 論文内容の要旨

氏名 (倉橋 愛)

論文題名

大英帝国の「外国語大学」—Fort William College の創設から廃校まで—

## 論文内容の要旨

本論文では、大英帝国の外国語教育組織として 1800 年に設立された、フォート・ウイリアム・カレッジについて、その構想から設立、廃止に至るまでの経緯やその中で行われた活動の内容を述べ、その全体像を把握することを目指した。使用した文献資料は、日本語文献、英語文献、ヒンディー語文献、ウルドゥー語文献、大英図書館に所蔵されている英語の公文書、イギリス議会文書データベースの文書である。

第 1 章の序論では、本論文の目的と構成について述べた。また、第 2 章では、先行研究について説明した。

第 3 章では、FWC が EIC の社員を教育する組織であったことから、EIC という組織に焦点を当てた上で、ウェルズリー総督が FWC を設立した動機について述べた。

イギリスの他に、主にポルトガル、オランダ、フランスが、インドを初めとするアジアへと進出した。しかし、これら 3 国では、FWC のような官吏養成機関は設立されなかった。EIC は 18 世紀に主に 2 回の財政危機に陥っており、19 世紀に EIC の活動が縮小されたのは、EIC の財政状況の悪さが原因であったと考えられる。こうした中でベンガル総督に就任したウェルズリーは、EIC の若手官吏を教育する組織を構想し、本国の取締役会の許可を得る前に FWC を設立した。ウェルズリー総督は「独断専行」、「野心家」等と批判され、行わないと約束していたインド国内での戦争を行ったため、敗北するとすぐに本国へ召還された人物である。しかし、彼は、インドへ向かう途中に関係者からインド国内でフランス革命思想が広まる恐れがあることを聞き、若手官吏が本国で十分な教育を受けないままインドに渡ってきていること、彼らにインド統治業務に必要な知識を教育する必要があることに気付いた。彼はまず、彼らを教育するためにオリエンタル学校でヒンドゥスターニー語とペルシア語の教育を行い、その後インド諸語や行政知識の教育と素行指導を行うために FWC を設立した。実際のウェルズリー総督の性格を知るのは難しいが、彼のような人物であったからこそ、FWC 設立という大規模な計画を成し得たのではないかと考えられる。

第 4 章では、FWC の組織について取り上げた。設立当初の時期の FWC に関連する出来事、組織内の各機構の任務、学籍制度、FWC の設立後になされた HC の設立、FWC が廃止に至るまでの経緯について述べた。

FWC の設立がベンガル管区司法審議会で承認されたのは、1800 年 7 月 10 日のことであった。その後、同年 11 月 24 日に講義が開始され、翌年 1801 年 2 月 6 日に最初の学期が正式に開始された。取締役会は、FWC の設立を 1800 年 5 月 7 日付の文書で許可していたが、言語科目だけでなく法律科目も開講するような大規模な教育組織を設立するとは知らされていなかったとして、その後 FWC の規模を縮小するよう命令を下した。FWC は、校舎を設立するためにガーデン・リーチと呼ばれる土地を購入していたが、取締役会の反対により、この土地も売却せられ、当初仮校舎としていたライターズ・ビルディングズという建物を引き続き賃貸契約で使用することとなった。FWC には、教育組織、評議員会、事務局、教会、図書館、食堂が置かれていた。評議員会のメンバーには、教員、聖職者、文官等の職務経験を持つ者も任命されていた。教会には学生の道徳面での指導を行うという役割が与えられ、学生は全員学長の定める日時に教会での礼拝に参加することが義務付けられていた。図書館には多くの貴重な写本や文献が置かれ、それらの蔵書は、カレッジの廃止後にインド国内の図書館へ移転されることとなった。FWC における様々なポストは、取締役会からの縮小命令によって次第に廃止されるようになり、特に FWC の後半の時期においては、試験官等のポストを兼務する者もいたことが確認されている。FWC の在籍期間は当初 3 年であったが、HC に官吏教育の役割が移譲されていったために、1807 年頃からは 3 年未満の在籍で良いとされた。学期制については、当初年 4 学期制で年 4 回 1 ヶ月ずつの休暇が定められていたが、1806 年に一旦休暇制度が廃止された後、1814 年に 2 学期制へと変更された際に休暇が再び設けられるようになった。こうした制度の変更は、FWC の教職員からの要望を受けてのことであった。FWC 側は HC の設立を、FWC の役割を補完する組織であるとして肯定的に受け止めていたとの先行研究もあるが、FWC の計画が EIC の財政に大きな負担をもたらすものであること、カリキュラムが広範で高度過ぎること、またインドよりもイギリスで教育する方が道徳的に望ましい等といった理由から、取締役会は FWC を廃止す

るよう命令することとなった。FWCは、オリエンタル学校を復活させるという形で、規模を縮小して存続することとなった。他の2管区であるマドラスとボンベイにもFWCと同様の教育組織が設立される予定であったが、実際にはマドラスのみに設立されることとなった。

第5章では、FWCで実施された教育の内容について述べた。FWCで開講された科目、実施された言語科目、試験、公開演習討議について取り上げた。

開講科目として文献や公式文書を照らし合わせて確認できるのは、アラビア語、ペルシア語、サンスクリット語、ヒンドゥスターニー語、ベンガル語、テルグ語、マラーティー語、タミル語、カンナダ語、ヨーロッパ近代語、ギリシア語、ラテン語、ヒンドゥー法、インド統治におけるイギリス政府の法令・法規、自然科学である。試験の優秀者は、年1回行われる公開演習討議の際に表彰され、賞金やメダルの授与も行われていた。当初表彰の対象となったのはヒンドゥスターニー語とペルシア語のみであったが、その後その他インド諸語や英文エッセイ等にも対象が広がられていった。公開演習討議はインド諸語で行われ、インドの社会・文化・言語等といった分野の議題に対して、賛成役、反対役、調整役に分かれて議論が繰り広げられた。FWCで公開演習討議が実施されたのは、イギリス政府のインド統治を正当化するという目的によるものであった。

第6章と第7章では、FWCにおいて活動した代表的な教職員を挙げ、彼らの経歴や彼らが行った活動について述べた。

第6章では、FWCの教員の中で特に大きな業績を残した、ジョン・ボルトウィック・ギルクリストについて、その経歴や活動を述べた。また、ギルクリストが考案したヒンドゥスターニー語正書法についても取り上げ、FWCの学生が公開演習討議で使用したヒンドゥスターニー語原稿中の表記との比較も行った。さらに、ギルクリストに協力したムンシーや、彼の後任を務めたイギリス人教員についても取り上げた。

ギルクリストは、10代の頃に医学を学びEICの軍医となったが、派遣先のインドでヒンドゥスターニー語に魅了され、ヒンドゥスターニー語研究者へと転身した。彼は、オリエンタル学校の頃から教鞭をとり、FWCでもヒンドゥスターニー語の教員を務めた。このことから、ギルクリストは、FWCの構想段階からウェルズリーに協力した、数少ない人物の1人であったと言える。彼は、FWCの内外で辞書や文法書を多く著した。また、彼は、FWCにおいてヒンドゥスターニー語のムンシーらを指揮して、多くの著作・翻訳活動を行った。

第7章では、ギルクリストらヒンドゥスターニー語担当以外のFWC教員について、その経歴や、彼らのFWCでの活動を中心に取り上げた。取り上げた人物は、クローディウス・ブキャナン、ウィリアム・ケアリー、ジェームズ・ディンウィディーである。

ブキャナンは、EICの礼拝堂付き牧師としてインドへ渡った人物である。彼は、FWCの副学長だけではなく、FWCにおいては数少ない、ギリシア語、ラテン語、英語の教員も兼務した。彼は、副学長として、学長と共に、学生に対してキリスト教に基づく道德教育を行う責任を担っていたと考えられる。また、彼は、FWC内で中国人を雇い、中国語文献の翻訳も行った。ケアリーも、宣教師としてインドに渡った人物である。彼は、キリスト教布教という視点から、官吏へのインド諸語教育を重要と見なした。彼は、FWCにおいてサンスクリット語、ベンガリー語、マラーティー語の教員を務め、インド人教師らの助けを得て、聖書を多くのインド諸語に翻訳した。また、彼は、イギリスのバプテスト教会やセランポール使節団、アジア協会等に所属し、これらの団体と連携しながら、印刷物の出版、インド人のための学校設立、セランポール・カレッジの設立にも尽力した。ディンウィディーは、FWCで自然科学を教えた数少ない人物である。取締役会からのFWC縮小命令を受け、彼は、FWCにおいて十分な業績を残すことができなかった。彼のFWCにおける活動は、ウェルズリーの理想が実を結ばなかった一例であったと言える。彼の活動について知ることのできる文献は数少ないが、外交官マカートニーに同行し中国で講義を行ったことがきっかけで、FWCに所属するようになったこと等について、記録された伝記が存在している。

第8章の結論では、本論文で明らかになったことを章別に挙げ、結論を導き出した。また、今後の課題についても述べた。

FWCに関する先行研究は少ないが、本論文ではFWCに関連する歴史、またFWCの組織や活動について、詳しく述べる事が出来た。今後、更なる研究が望まれる。

## 論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 ( 倉 橋 愛 )	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主査 言語文化研究科 教授 高橋 明
	副査 言語文化研究科 教授 松村耕光
	副査 言語文化研究科 教授 山根 聡
	副査 言語文化研究科准教授 長崎広子
	副査 言語文化研究科准教授 北田 信

## 論文審査の結果の要旨

本博士学位請求論文、『大英帝国の「外国語大学」—Fort William Collegeの創設から廃校まで』は、インドに派遣されてくるイギリス人若手官僚に現地の言語教育を施すことを最大の目的として、イギリス東インド会社(以下、EICと略記)が1800年にインドのカルカッタ(現コルカタ)に設置したFort William College(以下、FWCと略記する)の創設から廃校に至る歴史を辿りつつ、その組織と教育活動の全体像を実証的かつ詳細に明らかにした論考である。

FWCの設立を主導したインド総督ウェルズリーは、外国語教育を中心としながらも、優秀な植民地官僚に求められる教養と能力育成のために、総合的な教育を行う本格的な高等教育機関の必要性を痛感していた。若くしてインドに赴任するイギリス人官僚を、フランス革命の引き起こした思想的影響から守り、かつ本国を離れることで中断せざるを得なくなった彼らの教育を完成させるために、法学、自然科学、宗教教育を含む充実した教育課程を備えたカレッジとして、FWCが構想されたのもそのためであった。しかし、ウェルズリーが独断専行的に進めた、インド各地の在地勢力との度重なる戦争による戦費の増大がEICの財政状況を逼迫させたこともあり、EIC取締役会はFWC設立の直後から、その規模の縮小と経費削減を求めてウェルズリーと衝突し続けた。その結果、創設直後の1802年には早くも取締役会は、FWCの閉鎖を命ずる書簡をウェルズリーに送った。総督は命令自体には同意したものの、在籍学生が学んでいる途中であることなどを理由に、その後もさまざまな抵抗を試み、FWCの存続の道を探った。ウェルズリー自身は第二次マラータ戦争の戦後処理の不手際もあり、1805年に総督の職を辞して帰国した。最大の後ろ盾を失ったFWCは、その後、矢継ぎ早に出された経費と人的な削減要求と並行して、教育課程の縮小を求められ、やがて外国語教育機関としての実質をも失い、若手官僚を対象とするインド現地語諸語の試験機関としての役割に限定される形で、その後もしばし生きながらえたものの、結局、1853年に名実共に廃校となった。

FWCに関する従来の先行研究は、FWCが壮大な構想を持って創設されたにもかかわらず、実質的にヒンディー語、ウルドゥー語、ベンガル語などの現地語教育の「外国語学校」として存続せざるを得なかったこともあって、FWCの役割は早くに終わったものと見なし、その後の廃校に至るまでの組織や活動の変遷を追うことには熱心ではなかった。そうした中で、本論文は、FWCがまさに大英帝国の「外国語学校」であったことに積極的な意味を見だし、度重なる廃止や規模縮小の命令が出される中で言語試験実施機関としてではあっても、高い言語能力を備えた優秀なイギリス人官僚を輩出していったことを明らかにしており、これまでの研究の不備を埋める貴重な成果を示していると評価することができる。

執筆者は、創設の経緯を明らかにした後、FWCの各組織、学長から教員学生に至る管理運営体制について、資料に基づき綿密に解き明かしている。附属図書館の司書と所蔵書籍、教会で行われていた礼拝と学生との関わりなどについても、執筆者は見逃すことなく、興味深い事実の指摘を行っている。学生の在学年限の変遷、4学期制から2学期制への変更、学生が受け取っていた経済的支援、インド人協力者を個人的に雇用するための支援などについても、ややと

もすれば混乱している先行研究間の記述を細部にわたって整理し、最終的に信頼のできる事実関係を提示することに成功している。

ひき続く章に於いて、執筆者はFWCの教育内容についても、その設立当初の構想と実態との乖離について、本論文に於いて初めて正確な指摘を行っている。従来は、研究者たちの中にも、構想段階の法規で示された科目が実際に開講されていたと思ひ込む傾向があったが、執筆者はイギリス議会文書等の一次資料を渉猟し、科目設置の財政的裏付けの有無を確認するなど、資料を緻密に読み込むことで、従来、見落とされてきた新しい事実を見いだすことに成功している。これによって、実際にどのような言語科目及びその他の科目が開講されていたのかが明らかになった。複数の先行研究ですでに言及されていた情報についても、相互の整合性を問いつつ、しばしばそこに見られる誤解や誤認を指摘し、正しい情報の整理と提示を行っている。また、特に試験制度について、年に一度実施されていた公開演習討議試験の題目と学生たちの実際の答案例までも発掘し、その内容を検討することで、FWCが言語教育を通じて、望ましいイギリス人植民地官僚を養成する統治機構の一部機関であったことの意味について再確認している。しかし、こうした試験についての学生の答案の水準は非常に高いもので、「外国語学校」としてのその言語教育の成果が大きかったことがうかがわれる。このようにして、若きエリートとしてインドに赴任する、当時ライターと呼ばれた若手官僚たちに教育を施し、また途中からは高度な試験を課し、その能力を判定する組織として、FWCが果たした役割がいかに大きいものであったかが、本論文によって明らかにされている。

さて、FWCに関するもう一つの先行研究の蓄積は、FWCがヒンディー語、ウルドゥー語などインド諸言語の文法書、辞書、教科書、読本などの多種多様な教材群を生み出したこと、特にそれまで不十分な形でしか存在していなかった散文体の確立に大きく貢献したこと、さらに、その過程でムンシーと呼ばれた多くのインド人文学者の協力と活躍があったことに注目がされてきた。そのこと自体は、その後のインド及びパキスタン等、南アジア出身の研究者たちからすれば当然のことと言える。それに対して、本論文は、複数の主要なイギリス人研究者たちに着目し、その生涯を含めて彼らの貢献と業績について、詳細な事実と知見を提示している。この点について、本論文が南アジアに於ける近代インド諸語の発展史研究に貢献するところ大なるものがあると審査委員らは高く評価するところである。

本論文の最終章に於いて、ヒンディー語及びウルドゥー語の近代散文体の成立に大きな功績があったとされるイギリス人言語学者ギルクリストの生涯について詳しく述べた後、彼の多様な業績の中で、両言語の表記法を確立させようとする彼の努力を跡づける試みがなされている。この点については、資料を整理し彼が取り組んだ成果を、執筆者が要領よくまとめていることは評価できるものの、表記法の内容にまで深く踏み込んだ分析には至っておらず、事実の提示にとどまっている点はやや物足りない。しかし、ベンガル語とサンスクリット語に精通し、インド人の協力を得つつ、数多くのインドの地方語への聖書の翻訳を行うなど、インド諸語の研究と発展に貢献したもう一人のFWC教員であったウィリアム・ケアリーについて、その生涯と業績を詳細に紹介していることも本論文の重要な成果の一つと言える。

本論文は、FWCを修了して、インド各地に判事、高級行政官、軍官として赴任した学生たちの勤務先一覧など、貴重な資料的価値のある附録部分も含めれば、全体で280ページにもなる浩瀚な論考である。また、執筆に当たって参照した文献資料は、主要な先行研究業績を十分に網羅した上で、多くの一次資料に当たるなど、質量共に十分なものとなっている。さらに、英語に加えて、ヒンディー語、ウルドゥー語による多様な言語資料を活用していることは、本論文が、日本の「外国語大学」で学び始め、現在に至るまで一貫して外国語を深く学んできた執筆者でなくては、なしえなかった研究業績であることを如実に示している。

結論として、本論文は今後、FWCについて、あるいは南アジアの言語教育史、言語研究、さらにはこの時期のイギリス植民地体制全般について、何らかの実証的な研究をする際に、必ず参照されるべき価値ある業績として、今後の研究の発展に対する貢献が大なるものと評価できる。

以上のことから、総合的に判定した結果、審査委員は全員一致で本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するにふさわしい論文であるとの結論に達した。